

教 仏 名 聞

第64号
 (発行日)
 2016年1月1日
 発行所：真宗大谷派念佛寺
 〒6638113 西宮市
 甲子園口2丁目7-20
 電話・FAX (0798)
63-4488
 (発行人) 土井紀明
 mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
 http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
 ○〈同朋の会〉
 毎月22日 午後2時始。
 ○〈念仏座談会〉
 毎月2日と12日 午後3時始
 ○〈聖典学習会〉
 毎月6日 午後7時始。
 ○〈真宗入門講座〉
 毎月18日 午後6時30分始。
 * 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

神力自在なることは

(和讃法話)

神力自在なることは

測量すべきことぞなき

不思議の徳をあつめたり

無上尊を帰命せよ

〔讃阿弥陀仏偈和讃〕

*

現代語意識 (アミダ佛の浄土

に生まれ、菩薩となって不思議

な力を具え、なにものにも

さまたげられることなく、十

方の諸仏のところに至り供養

し法を聞き、また十方世界の

苦悩の衆生を教化されること

は、私たち凡夫のおもいはか

ることができない偉大なお働

きである。そういうすばらし

いお徳が浄土に生まれた菩薩

に具わるのは、もとはアミダ

如来様が法蔵菩薩として永い

ご修行をなされ、功徳を積み

集めて、それを与えて下さつ

たからである。この上なく尊

いアミダ仏に帰命したてまつ

れ)

*

このご和讃は浄土に往生し

た方が還相の菩薩となって活

動される、そのすばらしい働

きは「測量すべきことぞなき」

で、私たち凡夫の知性でとて

もうかがい知れない不可思議

なよきお働きであると、宗祖

は曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈』

の中の文意からうたわれたも

のです。

「測量」とは計測し量るこ

とで、人間の思惟分別で理解

し納得することです。そのよ

うな凡夫のおもんばかりがお

よばないと言われるのは、『讃

阿弥陀仏偈』では例え、

「アミダ如来の安楽浄土での

菩薩方は、如来の神通力を身

につけて、一念といわれる短

時間に十方諸仏に詣でて、諸

仏を供養したてまつる」

と曇鸞様によつて讃えられて

いますが、浄土の菩薩はあつ

という間にさまざまな仏たち

のところにおまいりして供養

される、といわれるのです。

こういうことは、とても私

たちの考えおよぶものではな

いのですが、それは曇鸞様も

親鸞聖人も「測量できない不

可思議なすばらしい働きだ」

と讃歎しておられるのです。

分からないから、それは幻

ていけないような不思議なこ

とが説かれていることがあり

ます。それを読んで理解でき

なかつたり分からなかつたり

すると、「そんなことがあるも

んか」と疑い捨ててしまうこ

とがよくあります。

しかし親鸞聖人や高僧方は、

經典に説かれている分からな

いことや納得できない話に対

して、「私のような愚かな凡夫

には分からないけれども、そ

れはきつと深いおぼしめしが

あるのだろう。尊いお心があ

るのであるう。」と、(仏の説

法)に対して頭を下げ謙虚

に聞いておられます。

ここでは、「浄土に生まれた

浄土の菩薩はどういうお働き

をして下さっているのか」と

いうことについて、仏の説法

を聞いて、「測量することはと

てもできないが、本当に不可

思議で有難いことだ」と受けと

つておられます。

ご自分の知恵や知性は仏の

広大なさとの智慧には遠く

およばないという限界をちや

んと自覚されていたからです。

かといつて、お聞かせいた

だいた仏説だけに固執して、

それ以外はウソであるとか、

邪教であるとか、無価値であ

るといふような、自分の聞き

学んだものだけが絶対正しい

と固執されることはありません

ん。自分の信じている説であ

つても、それに固執し他を否

定してはばからないのは、仏

教では「見取見」といつてよ

こしまな見解(煩惱)として

否定されています。

そこで、仏法を学ぶ場合、

仏の説法を聞いて自分に分か

らない個所とか納得できない

点があると、それを否定して

いく態度では仏の教えの広大

な真理の海に入ることはでき

ません。「仏法の大海には信を

もつて能入となす」と古来言

われていますように、仏法に

たいして、(今の私にはまだま

だ分からないことが多いけれ

ども、そこには尊い真理が説

かれていゝんだ」という信頼

を持つこと、そこから仏法に

入っていくことができるので

す。

「聞いて分からないから、

もうやめた」「私にはとても納

得できないから、もう結構」

となると、入口のところまで

引き返すようなものです。その

裏には「自分の知性に受けとれないものは不確で価値のないものだ」という自分の知性に対する過信があるとも言えるでしょう。自分は真理も真実もまだまだ分からない愚かな者だと思えば、真実をさとられた覚者（仏）のお言葉を謙虚に聞こうという態度になるのです。

ただここが難しいところなのですが、世の中にはいろいろな（教えなるもの）があつて、

「私の説くところは真理である」といつて説かれる場合がよくありますが、中にはとてもない間違つた教えやいかかわしい教えがあるのです。

そんな教えに入つてしまつて、自分の人生のみならず他者にも害となる、そういう場合がときどきありますね。それは皆さんよくご存知なことです。

そのため、「だからもう教えとか宗教はおことわりだ」とはじめから敬遠する人もでてきます。

説かれている教えなるものが正しい真理を説いているのか、間違つたことを説いているのか、真理にであつていない場合にその見極めができず、そのためにゆがんだ教えに入り、そこから出ることも

ままならぬことになりかねません。

それがもとで社会的な事件などが起こると、「宗教ざらい」「宗教敬遠」の人が多くなつてしまうのです。

しかし、世の中にはまことの真理が説かれている教えが当然あります。そういう教えにであいい、それを学び、自分にいただいていくことができたらそれは非常に意味のあることです。

そうではなく、「もう教えなんかいらぬ、自分の考えだけでよい」という人は、一応無難ですが、全人生がややもすれば「空過」といわれるように、何一つ確かな真実にあわずに、年月がただむなしく過ぎ去つてしまうことになりかねません。どれだけ生きても、人生に豊かな収穫がなかったという風におわつてしまいます。

では、間違つた教えやその集団をどう見分けるか。それは難しいといえれば難しいです。けれども、一応のめやすはあります。注意しなくてはいけない教え（あるいは教団）は、

一つは、自分たちの教えだけが真実で、そのほかは邪教

である、と説く。そしていつたん入ると脱退するのが難しく、出ようとするとおどされる。

二つには、寄附や献金を何度も要求される。

三には、先祖霊や神・仏などのタタリやバチを強調して、怖れをいだかせ、また病氣直し、商売繁盛、家庭円満などの現世の利益を強調する。

概してこういつた教えは注意が必要です。

そして未だ教団の歴史が浅く、その教が本当に真実であるかどうかは歴史的にまだまだ証しされていないような教義や団体も注意が必要です。いわんや、現代、話題になっているような暴力を肯定するような教えは非常に危ないです。

逆に、「自分は無宗教でいい、自分は宗教はいらない」と、無宗教を知性のあるしるしであるかのごとくにいう人がよくあります。自分の人生がなんとか順調である場合は、それでいけるでしょうが、何かの縁で病気が重なつたり、借金を抱えて困窮するとか、家族がいがいみあうとかで、どうしてよいか分からなくなつたりしたとき、あるいは自分

の人生がなんとも空しくなるとかというような、マイナス要因が重なる、ふつとこうしたよこしまな教えや団体に引き込まれてしまう可能性があるので。

それを防ぐ意味においても真実の信心あるいは真実の思想を知つておくこと、学んでおくこと、聞いておくことは大事なことです。宗教とか思想は無関心であればそれで済むのではなく、いつでも間違つた思想・信仰にはまりかぬないので、真実の思想・信仰を聞いておく、知つておく、できれば信じることは非常に大事なことです。

世界の歴史においても、思想・信仰が間違つたと極めて悲惨なことが過去に何度も起こりました。

近年においてだけでも、ナチスによるユダヤ人虐殺、共産主義（スターリン主義）による反革命分子の大粛清、カ

ンボジャの大虐殺などの百万単位の殺害、また最近のオオム真理教事件やイスラム国による頻発するテロなどなど、これらすべてに思想や信仰のゆがみや間違いがおおきく関わっています。経済的な損得だけの問題なら殺害事件が起こつてもそれほど大規模には

なりません。ところが思想的に間違つてくると、自分のやつていることは正しいとなり、多くの人を殺しても罪と感ぜなくなり、無惨なことが続くのです。

ですから、たとえ深い信心はなくても、真実の思想や信仰を学ぶことによつて、何が真実であり、何が仮のものであり、何が邪悪のものであるかを見極める眼を養つておくこと、そしてそれを若い人たちに伝えることは、一人一人の人生のみならず、社会や世界の安定にとつて非常に大事なことです。

ところで、浄土の菩薩の働きは大きく分けて二つと言われています。一つは諸仏のところにいつて供養し聞法して、仏の智慧を磨くことです。これを「供養諸仏」といい、これは自利です。

二つには衆生のところに行つて、衆生の苦を救うていくことです。これを教化衆生といい、これは利他です。

浄土の菩薩の不可思議なお働きの内容が供養諸仏と教化衆生です。

この自利利他が限りなく展開し無窮に行いたもうのが浄土の菩薩と言われています。

私たちが仏法にあうことができ、仏法をいただくようになったのも、すでに浄土に生まれた方々が、私たちのところ還ってこられて働きかけて下さった浄土の菩薩たちのおかげがあったからとも言えます。そしてこのように浄土の菩薩が、還相のお働きができる源は如来法蔵様のご苦労（願行）のゆえでありました。

さて、「聞法供養」ということですが、これは娑婆の私たちの聞法上においても、当然あることなのです。仏法の師（諸仏）にであって法を聞く、それによって仏法の大海に入らせていただくのです。

私の場合、最初の師は佐々木蓮麿師でした。佐々木師はお念仏に生きる人は身が軽やかになり、心が自由であることを身をもって教えて下さいました。

次におであいした藤原正遠師は他者に対する細やかなやさしさをことに教えられました。

次に松並松五郎師にあいました。師は念仏を聞く一つで助かることと、常念仏の尊いお姿を知らせて下さいました。次に木村無相師にあいま

た。師は、お念仏は我執我愛のどうにもならない凡夫に与えられたただ一つの道であることを教えられました。

浄土の菩薩は、供養諸仏による聞法と利他教化において「神力自在」で、思いおよばないほど不可思議な素晴らしい活動をなされるのであります。

そこで「不思議の徳をあつめたり 無上尊を帰命せよ」で、浄土の菩薩がはかりがたいほどのすばらしい徳を具えておられるのは、もとは如来法蔵様が永きご修行によって積み集めた功德、それを与えて下さったからです。

だから、この上なき尊い阿弥陀仏をよりどころとせよ、と宗祖はお勧めになるのであります。

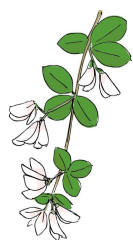


《住職雑感》

お正月のお餅もおせちも、みなないだいたいもので、我が家で用意をすることもなく、また家の大掃除も報恩講の時にかなりしてしまうので、昔のように年末にばたばたするほど

のことはなくなりました。それだけまた正月気分は薄れてしまったが、敬虔な方は京都のご本山まで修正会に参られるようである。正月二日には子や孫が一堂に会し、お勤めをするが、孫にどうい話をしたらいいか、それが大変難しい。

今年コレをしなければならぬというような義務的な事柄はない。ただ今年には恩師であった木村無相さんの三十三回忌にあたる。木村さんからいただいたお手紙を集めて本にしたいと思っている。木村さん三十三回忌法要が、藤枝宏寿師のお世話で福井県越前市の和上苑で三月六日（午後一時始）に営まれる。それには是非出席したいと思っている。けれども参加できるので縁のある方は参加してほしい。昨年末、大谷大学の四十二年卒業生の同窓会を四月二日にしたいという便りがありこれも出席しようと思う。東本願寺前の重信寮で同室だった金沢の鳥越順丸君らが発起人なので、彼にも五十年ぶりに会えそうだ。念佛寺のHPは副住職がえらく力を入れたので、読みやすくなり美しくなった。近頃はときたまHPを見たといつて法要を頼まれることさえある。ネットの時代になつたのを肌で感じる。



《遠方法話予定》

- *一月二十一日・二十二日。福岡県八女市。明永寺。午前より。
 - *二月十七日。泉正寺。愛知県刈谷市東境町児山223。十時から午後。TEL 0566・36・5410
 - *三月三日。名古屋別院・午前十時始・午後（座談有り）
 - *三月十一日。福井別院。午前十時始・午後（座談有り）
 - *四月十日〜十一日。広島市安芸区。龍善寺。午後より。
 - *五月十九日〜二十一日。福井別院
 - *午前十時始・午後（座談有り）
 - *六月四日。福井別院。午前十時・午後（座談有り）
 - *七月九日。福井別院。午前十時・午後（座談有り）
 - *七月十四日〜十五日。石川県鳳珠郡穴水町。法琳寺。午後より。
- 以上七月までの予定です。詳しくは念佛寺にお尋ね下さい。

《真宗入門講座》
（お勤め練習と正信偈の学習）
毎月十八日（午後六時半始）
担当（副住職）土井尚存

平成28年度御年忌年回表

1周忌	平成27年	亡
3回忌	平成26年	亡
7回忌	平成22年	亡
13回忌	平成16年	亡
17回忌	平成12年	亡
23回忌	平成6年	亡
(25回忌)	平成4年	亡
27回忌	平成2年	亡
33回忌	昭和59年	亡
50回忌	昭和42年	亡

（時には、住職が葬儀や法話のためお参りができない場合があります。その時は副住職又は代理の僧侶の方がお参り致します）

《念佛寺同朋会》
一月二十一日 pm 2時
法話・副住職 土井尚存

《お知らせ》
四月二日の念仏座談会
は休みます。

《お知らせ》
三月六日の聖典学習会
は三月五日（pm 7）
に変更致します。
テキストは梯実圓師の「教
行信證」（教行の巻）です。

信心夜話

松並松五郎さんいわく。

南無阿弥陀仏 この声を聞いてみると、
（お前に相談なしに、お前の南無阿弥陀仏に成ったぞや。いやでもあろうが、この度はこの弥陀にめんじて、助けさせてくれよと、阿弥陀様が、両手を仕えて、頭を下げて頼んで御座る御姿、御声が、今この口に現れ給う南無阿弥陀仏であります。そうすれば念仏するとか、せねばならぬと言う事に離れて、唯、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と聞くばかり。南無阿弥陀仏

（『松並松五郎念仏語録』より）

* * *

まず、凡夫に相談なしに、阿弥陀仏は本願を建て、一切の衆生を助ける仏、助け得る仏になっておられる。阿弥陀仏の本願のお誓いは、阿弥陀仏が私（たち）と相談して交わした約束ではない。

阿弥陀仏が衆生を助けようとするのに、衆生（私）に相談してもラチはあかない。何一つまことがなく、私たちの身も心もまったくあてにならず、何が真実であり何が仮であり何が虚偽であるか見分けもつかず、助かる道について西も東もわからず、まったく頼みにもならぬ私たち。このような私たちに相談しても全然ダメなのである。俗なたとえで言えば、五つや六つの子どもに大事な土地売買の相談をもちかける人はおらない。衆生が仏になる相談は、迷いを迷いとも知らず、さとの道は何も分

からぬ愚かな私たちに相談はしなさないが、衆生を我が子とみそなわしたもう阿弥陀仏は私たちがほつてはおけぬ。私は仏になりたいとも思わず、娑婆が好きで、死につつありながら明日も知れぬいのちをアテにしている衆生。

その衆生一人一人を（我が子）と感同し、我が子ゆえにどうしても捨てられぬ。どこどこまでも仏にしたい助けたいとおぼしめす阿弥陀仏。その阿弥陀仏は、私たちの方から「助けて下さい。お願いします」と願う前に、すでに私たちを助ける仏になっておられる。

如来法蔵様は、衆生を仏にならしめたい、助けたいとおぼしめして五劫に思案し、永きご修行をなして、「助けたい」の願を成就して、すでに南無阿弥陀仏となって私たちを「引き受ける」と喚び続けておられる。

相談といえば、私たちはとかく自分の助かるすべを自分の心に相談しようとする。それがはや間違いである。自分の心をいくら詮索し、自分の心を調べ、助かる証拠やしるしを求めても、助かるような何物も私の心にはありはしない。あるように思うのは自分の心にだまされているのである。「心は万劫の仇なり」という言葉がある。

浄土へ生まれる道を尋ねるのに、地獄に引き連れようといつもしている我が心に相談するとは、敵に助かる道を相談するようなもの。

往生の道は仏に相談すればいい。南無阿弥陀仏に相談すればいい。すると答えは即座に出されている。南無阿弥陀仏は、「汝を助ける仕事は弥陀が全面的に引き受けている。汝はただ念佛申すだけでよい」との

大悲の仰せである。

この仰せは古来から変わらぬ阿弥陀仏の決定である。阿弥陀仏の真実にして虚偽のない決定を聞く。阿弥陀仏の大悲の決定が私に突き通っているのを信心という。

自分の心に相談し、「真宗の教えを有難く思っているから自分は助けられるに違いない」とか「自分は喜んでいいるから大丈夫」だとか「よく真宗を納得できているから、それでいい」とか「自分の心はスッキリしているから大丈夫」などなど、自分の姿や自分の心の有り様で助かるように思うのがすでに我が心にたぶらかされているのである。まるでたよりない自分の心を当てにしているのである。凡夫の心ほど心迷わすものはない。

私たちが知らぬ間にすでに私を助ける仏がまします、ということ。これは仏説に聞かねば決して分かるものではない。世間の常識をこえた不可思議なことである。

この不思議を、人とならぬ歴史の上に出現された釈迦如来様が説いて下さって初めて衆生は知ることができたのである。お釈迦様はすでに弥陀のお救いを説き示して下さっているのに、そのことを聞かず、聞いても受けいれず、流浪している私がおこにいる。この真実を無視し、如来のご恩を無視している、これが罪のなかの罪。

阿弥陀仏のお誓い（第十八願）に「もし生まれずは正覚を取らじ」とまで誓われて、すでに一切衆生を救うことのできる阿弥陀仏になってまします。

にもかかわらず、私はそのことを知らず信ぜず、阿弥陀仏のご苦勞を無視し続けてきた。そして阿弥陀仏の方から、「助ける」と仰せ下さるのみならず「助けさせてくれよ」と、頭までさげて喚んで下さるお姿が口に現れる南無阿弥陀仏。

であれば、私が、称えにやならぬとか称えなくてもいいとか、またどれだけ念仏したとかしないとか、そういう問題ではない。今、南無阿弥陀仏と仰せ下さる阿弥陀仏の大悲を聞くばかりである。

「いやでもあろうが、この度はこの弥陀にめんじて、助けさせてくれよ」

「いやでもあろうが 助けさせてくれよ」に、やるせない如来の親心を感じる。お医者嫌い、クスリ嫌いの病氣の子どもに、親が「イヤであるう、嫌いであるうが」といやがる子をなだめすかせて、病院へ連れて行って診察してもらいクスリをのませる。これみな親心。娑婆が好きで仏法嫌い、念仏嫌いの私に、「いやであるうが、親にめんじてどうか、この親に助けさせてくれよ」とまでの大悲の仏心が南無阿弥陀仏の名となって現れたものである。

「両手を仕えて、頭を下げて頼んで御座る御姿」は、阿弥陀仏は「もし汝が浄土に生まれることができないようなら仏の座には着かない」（若くは不生者不取正覚）とまで誓い、衆生が助からなかつたらこの弥陀も助からぬとのお心。病氣で苦しんでいる子どもを昼夜つきつきりで看病している親は、病氣の子がなおらなければ同苦の親の苦もなおらない、との大悲同感のお心。それゆえ、「どうかこの南無阿弥陀仏のクスリを飲んでくれよ、いやがらずに受けとつてくれよ、お前が助からなければ、この親も助からぬのだから」と我が子に頭を下げて頼んでおられるお姿、それが我が口にまで出て下さり、今ここに喚びかけて下さる大悲の阿弥陀仏の喚び声。ナムアマミダブツ。

この声を聞くばかり、大悲を聞くばかり、聞かされているだけで充分である、とのお心であろう。（了）